

# 教務だより

2014年11月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 一念岩をも通す2014 受験に学ぶ！

茗溪塾塾長 宇野 雅春

2014年度入試で第一志望の筑波大附属高校に見事合格を果たしたK君の「卒塾式での答辞」が今でも思い出されます。

「2月16日、僕の第一志望筑波大附属高校の発表日。その日僕はこれまでの度重なる不合格を思い出し、沈んでいました。『どうせまた、落ちたのだからな』と決めつけて合格発表を見に行くのをためらい、M先生に早く行けと言われても駄々をこねて合格発表開始の時刻になってようやくF教室を出ました。」

成績では一番手であったK君の入試は1月17日の千葉県私立の受験スタートから不調が続き、先生も本人も「どうしてなのか？」と首をひねりながらも、焦燥感が漂っていました。受験は模試のようにはいかないさまざまな要素が絡み、予定通りには進まないものです。用意を万全にしてきたつもりでも、失敗はあります。

「1時間電車で揺られて、掲示板の前に到着。顔を上げた瞬間、1071が僕の目に飛び込んできました。と同時に体温が二度上昇。三、四回見直して近寄ったり、離れたりにしてみても番号は確かにそこにありました。その後、興奮冷めやらぬまま家族に電話と教室に電話をかけました。親は自分が見たこともない様子で喜んでいたり、M先生は涙を流していました。」

中学一年のとき、高校受験で全勝し卒塾式で答辞を述べた部活の先輩にあこがれての筑波大附属高校第一志望でした。確かに中1中2の時に比べて中3の一年間は山あり谷ありの伸び悩みの時期でもありましたが、実際に入試がふたを開けてみると、全勝を夢見た受験が現実には予想外の厳しいものになりました。

彼が不合格だった高校の「他教室の仲間たちの合格FAX」が何枚も送られてきたのは本当はつらかったと思います。友達を祝福しながらも素直に喜べない日々が続いたようです。

「次の私国立の受験が再開するまでの約2週間でリベンジする力をつけるために今まで以上に過去問を解き、自己を見つめ直し何が自分に足りないのかを考えました。」

予想外の苦しい状況の中で、彼は次のさらに高い学校に挑みます。私の印象は理科社会の能力が非常に高いことから、5教科型の入試なら彼に勝ち目があるのではないかという思いはありました。ところが、次の開成も不合格。続いて受けた第一志望の筑波大附属。

「教科ごとに緊張し全力を尽くしたという感覚がありました」

「合格発表までの三日間完全に落ちたと決めつけて、部屋からも出ず勉強とは別の世界に逃げていました。」…そして合格。彼の答辞はこの苦しい受験の中で学んだことを綴っています。「全勝出来なかったことを僕は後悔していません。僕は高校受験を通して人として成長するのに必要なものを得ることができたからです。何度も何度も負けることで『人の痛み』というものを知ったし、つらい受験期を教室のメンバーとともに乗り越えることで仲間の素晴らしさを感じることができたし、また最後の最後まであきらめないことの大切さを知りました。」

順調に合格を出し続けていっても、第一志望合格は逃してしまうという方が圧倒的に多いと思います。ですから、K君の受験はむしろ大成功といえます。それ以上に彼自身を成長させてくれたともいえるのです。苦しさにも耐え果敢にチャレンジを続けることでしか得られない「大きな成長」であったと思います。